

## 『国富論』第1篇第5章冒頭三段落について ——「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」の視点から——

中 川 栄 治\*

### 1. 序

アダム・スミスは、『国富論』第1篇第5章の第1、第2段落で次のように述べる。

「①人が富んでいたり貧しかったり (rich or poor) するのは、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。②だが、分業がひとたび徹底的に行きわたるようになったあとは、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さな部分にすぎない。③彼は、その圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならないのであって、彼は、自分が支配できるその労働の量、または自分が購買することのできるその労働の量に応じて、富んでいたり、貧しかったりするにちがいない。④したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。⑤それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である」(Smith (1976; 1776)——以下、WN と略記——Lv.1 (大河内訳 I, 52頁)。『国富論』からの引用文中の番号は中川。以下、同様)。

「①あらゆる物の真実価格 (real price), すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって真に費やさせる (cost) ものは、それを獲得するための労苦と骨折り (toil and trouble) である。②あらゆる物が、それを獲得

した人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思う人にとって、真にどれほどの値打ちがあるか (worth) といえば、それによって彼自身が省くことができ、またそれによって他の人々に課することのできる労苦と骨折りである。③貨幣または財貨でもって買われるものは、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものと全く同じように、労働によって購買されるのである。④その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、この労苦を我々から省いてくれる。⑤それらは、ある一定量の労働の価値を含んでおり (contain the value of a certain quantity of labour), その一定量の労働の価値を我々は、その時、それと等しい量の価値を含んでいるとみなされるものと交換するのである。⑥労働は、すべての物に対して支払われた (paid) 最初の代価 (the first price), 本源的購買貨幣 (the original purchasing money) であった。⑦世界のすべての富 (wealth) が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。⑧そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである」(WN Lv.2 (大河内訳 I, 52–53頁))。

リカードは、上の第1、第2段落との関連で、第2段落中、また第6章の「初期未開の社会状態」に関する第1段落中に、スミスの議論における投下労働量による商品価値規定の考えをみるとともに、スミスの議論におけるその投

\* 広島経済大学名誉教授

下労働量と支配労働量との混同といった見方を提示する<sup>1)</sup>。そして、このような投下労働量と支配労働量との混同等といった視点からの解釈は、差異を伴いつつも、その後の諸論者によって引き継がれることとなった<sup>2)</sup>。

また、マルクスは、スミスの議論では、「価値の尺度のもとで、内在的尺度——同時に価値の実体を形成するもの——が、貨幣は価値の尺度だという意味における価値の尺度と混同されている」とし<sup>3)</sup>、事実上、投下労働を前者の尺度、支配労働を後者の尺度にあたるものとみる。「価値尺度」という言葉には、価値の実体をなし・価値を規制し・価値を内在的に較量しうる尺度といった意味での「価値の内在的尺度」と、例えば貨幣が価値の尺度であるといった意味での「価値の外在的尺度」という二つの意味合いがあるとしつつ、スミスの議論におけるそれらの尺度の混同、投下労働と支配労働との混同等といったことを問題にする線に沿った議論もまた、その後の諸論者によって引き継がれることとなった<sup>4)</sup>。

欧米では、そのようなリカードウ、マルクスの線に沿った研究とともに、新古典派をはじめ、いわゆる現代経済学（近代経済学）の視点からの研究が多くなされてきた。そこでも、リカードウ、マルクスの解釈は、批判・論争の対象という形で、非マルクス経済学的論者の解釈にも影響を与えてきたが、その接近方法の違いを理解するうえでの、また、価値尺度に関するスミスの議論を理解するうえでの鍵の一つは、「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」ということに関わる認識にあるといえる。

筆者は、中川（2020）で、『国富論』第1篇第5章でのスミスの分析対象となっている社会としての「商業的社会」の性格を明らかにする試みをなした。そして、中川（2022）で、『国富論』第1篇第5章は主に価値尺度の問題を扱い、その議論は、一時点における価値測定に関

わるもの（第1－第6段落）、異時点間における価値測定に関わるもの（第7－第22段落）、現実社会での現実の取引で機能している尺度および貨幣の制度に関わるもの（第23－42段落）から構成されているという把握を提示した。本稿は、そのようなものとしての価値尺度に関するスミスの議論に関わる個々の論点の検討に際し、「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」という点に留意しつつ、第5章冒頭三段落の内容を明らかにしようとするものである。文章記述中での非漢字圏論者名については、カタカナ表記を心掛けた。

## 2. ミークの研究

スミスにおける投下労働量と支配労働量との混同といったリカードウの線に沿った議論、および、スミスにおける「価値の内在的尺度」と「価値の外在的尺度」との混同、投下労働と支配労働との混同といったマルクスの線に沿った議論、他方での、それらに批判的立場をとる新古典派の論者等の議論との間にあって、ミークの研究は、それら両グループ間の相互認識への糸口を提示している。

ミーク（1973; 1956）は、スミスの議論における支配労働に関して、「支配される現在の労働」と「支配される商品に体化されている過去の労働」といったことに言及する。そのうえで、価値の内容、実体を測定するだけでなくその内容または実体を体现する一種の内在的尺度の可能性を認めつつも、スミスが考えていた尺度はそのような内在的尺度ではないとみるとともに、スミスが真の価値尺度としようとしたのは、「支配される現在の労働」としての支配労働尺度であったとみる。そしてこのミークの場合には、そのようなものとしての支配労働尺度そのものは、労働力が商品となった資本主義社会のしるしを身に付けているのであるが、スミスはその考えを、資本主義社会だけでなく、社会的分業

によって特徴づけられるあらゆる種類の社会に妥当するものとして、一般化しようとするともに、その尺度は、貨幣のバールを貫いて交換の外的現象の奥に横たわる基本的社会関係にまで到達するという意味で、真の尺度なのだ、と主張もしたのであり、第5章の第1、第2段落は、スミスがそのようなことをなしている箇所、と捉えられる<sup>5)</sup>。そして、このミークの研究は、マルクス経済学をベースとしつつも、例えば、シュムペーターを、価値の源泉 (source) または原因 (cause) の説明と、価値の規制 (regulation) または決定 (determination) の説明とは、厳密には同一のことではないということを認識していた数少ない経済思想史家の一人と捉えており——シュムペーター (1954) は、ある事物が交換価値を持つことを説明する要因を指示することと価値を規制または規定 (govern) する要因を指示することとは厳密には同一のことではない、としている<sup>6)</sup>——、スミスの場合にも、事実上、「価値の原因の問題」、「価値の決定因の問題」そして「価値尺度の問題」はそれぞれ別個な三つの問題となっているとみつつ、スミスの議論に接近するのである<sup>7)</sup>。

### 3. スミスの議論における「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」：諸研究

例えばヴィーザー (1889) は、「価値の存在 (Vorkommen) および価値の大きさ (Grösse) の、原因 (Ursache; Ursachen)」といった見方を示す<sup>8)</sup>。リープクネヒト (1902) の場合には事実上、「価値の事実についての説明 (価値の源泉 (Quelle) についての説明) および価値の特定の高さについての説明 (価値の大きさを決定 (bestimmen) する事情、価値の決定因、についての説明)」を与えるものが、「価値の原因 (Wertursache; cause of value)」についての説明を与えるものということになっている、とも

いえる<sup>9)</sup>。また、サウエル (1974) は事実上、古典派経済学の時代にあってベイリー (1967; 1825) は、価値の性質 (nature)、そして価値の尺度 (measures) ということと通例混同されていた価値の原因 (causes) ということ、前二者から明確に区別した最初の人物であった、またそこでの、その価値の原因を扱うものが、——価値 (価格) の決定 (determination) についての説明を与えるものという意味での——価値「理論」 ('theory' of value) にあたるものであった、とみる<sup>10)</sup>。そして、ドップ (1973) は、「価値の原因 (cause) ないし原則 (rule) (すなわち、原理 (principle))」, といった捉え方を示す<sup>11)</sup>。

筆者は、中川 (2016) 中で、「価値の因果的説明 (causal explanation)」という言葉、例えば価値の原因 (cause)、価値の源泉 (source; origin)、価値の決定 (determination)、価値の規制 (regulation) 等々に関わるものとして使用し、「価値の因果的説明の問題と価値尺度の問題、あるいはまた、スミスの議論における価値の因果的説明の問題と価値尺度の問題」といった視点から、初版あるいは初出が19世紀末から1970年代末の欧米文献をみる試みをした。そして、例えば、それら諸研究には、以下のような諸類型が見出されうることを示した。

**【類型1】** 事実上スミスの議論における「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」といった視点をとつつ、スミスの議論をみるものの。

(1-1) 事実上、スミスの議論においては「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」とは別個な問題であったといった見方をとつつ、スミスの議論をみるもの。

(1-2) 事実上、本来「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」とは別個なものであるという認識に立ち、そのうえで、スミスの議

論におけるそれらの問題は、といった見方をとりつつ、スミスの議論に接近するもの。

そして、この(1-2)のものはさらに、(1-2-a)事実上、本来別個な問題としての「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」といった認識に立つとともに、明示的にあるいは事実上、そのことについてのスミスの認識は、といった見方をとりつつ、スミスの議論に接近するもの、(1-2-b)事実上、「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」とは本来別個な問題とみつつも、そのことについてのスミスの認識等といったことは問題にすることなく、「価値の因果的説明の問題」とは本来別個な問題としての、スミスの議論におけ「価値尺度の問題」、といった見方をとりつつ、スミスの議論に接近するもの、といった類型が見出される。

**【類型2】**「価値の原因」、「価値の源泉」、「価値の決定因」、「価値の尺度」等々といったことに言及しつつも、スミスの議論における「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」といった視点をとることなく、事実上それらを同一の問題として捉えつつ、スミスの議論に接近しているといえるもの。

**【類型3】**「価値の内在的尺度」という考えがとられることによって、事実上、「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」はその「価値の内在的尺度」の問題という一つの問題として把握されることになっているといった意味で、スミスの議論における「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」といった視点をとることなし、スミスの議論に接近しているといえるもの。

**【類型4】**事実上、スミスの議論における三つの別個な問題としての、「価値の原因の問題」、「価値の決定因の問題」、「価値尺度の問題」、といった視点をとりつつ、スミスの議論に接近するもの<sup>12)</sup>。

リカードウ、マルクスと上の諸類型ということでは、リカードウは類型2に近く<sup>13)</sup>、マルクスは類型3ということになり、そして、新古典派をはじめ現代経済学的視点からの多くの論者は類型1、ミーケ(1973; 1956)は類型4、ということになる。

また、1980年代以降の欧米での研究についていえば、例えば、スラフファの視点から接近するオドーネル(1990)は事実上、「価値の説明(価値の因果的説明)の問題・価値理論の問題」と「価値尺度の問題」とは論理的に別個の問題と捉え、そして、スミスは「価値の説明」の脈絡でも「価値尺度」の脈絡でも、「体化労働」と「支配労働」とを混同してはいなかった、とする(類型1-2-a)<sup>14)</sup>。

カーリル(1991)は事実上、古典派の枠組みでは、価値尺度と価値理論との区別はなく、また、その同一視は誤ったものでもなく、価値の理論と価値の尺度との区別が求められる新古典派的枠組みからは、スミスの議論を正當に扱えないとみている、といえる<sup>15)</sup>。

また、ヒューケル(2000a)は、スミスの議論における真の価値尺度を支配労働とみるとともに、価値の尺度(measure)と価値の規制者(regulator)との間の違いをスミスは理解していたとみつつ(類型1-2-a)、議論を展開する<sup>16)</sup>。

欧米での研究との比較でいえば、日本では、マルクスの(もしくは、リカードウ経由のマルクスの)視点、枠組みからの研究が、一つの有力な流れを形成していたのであり、羽鳥の研究は、ある意味でその成果の一例を示すものともいえるが、羽鳥(1990)は、事実上、『国富論』第1篇第5章の扱う社会は単純商品生産社会ではなく資本主義的商品生産社会、資本・賃労働関係が生成・展開している社会(スミスのいう「商業社会」)とみ、その第5章の主題は支配労働＝価値尺度説の提出およびその論証であった、とみるとともに、第2段落の前半に投下労働＝



価値源泉説、後半に支配労働＝価値尺度説がみられ、第7段落冒頭の金銀価値に関する言及中に、投下労働＝価値規定説（商品価値の大小・騰落は当該商品の生産に投下された労働量の大小・増減によって規定されるという見解）がみられる、とする<sup>17)</sup>。事実上、それは、類型4に近い見方といえる。

また、小沼（1983）は、スミスの議論においては、初期未開の社会状態では支配労働量を規制するのは投下労働量のみであり、資本蓄積と土地占有以後の社会では、支配労働量と投下労働量とが一致しないことになっているのであるが、いずれの社会についても価値尺度については支配労働＝価値尺度説が主張されている、とする。また、スミスの議論においては、初期未開の社会状態を想定する第5章第1、第2段落で、商品の交換価値の源泉はその生産に投下された労働であるという投下労働＝価値源泉説で支配労働＝価値尺度説が基礎づけられとともに、その支配労働＝価値尺度説は、支配労働量と投下労働量とが一致しない資本蓄積と土地占有以後の社会でも妥当するものということになっているのであり、また、他方の投下労働＝価値源泉説そのものは、資本蓄積と土地占有以後の社会については放棄されたというわけではなく、例えば第11章中でも主張されている（ここでは、投下労働量は、商品の交換価値を規制する諸要因のうちの一つ）、とする<sup>18)</sup>。小沼も事実上、類型4に近い位置にあるといえる。

越智（1998）は、第5章第2段落中に投下労働＝価値源泉説（越智（1998）では、投下労働＝価値源泉論）をみる見解を否定する。その論理は以下の通り。すなわち、第2段落の①文中での「真実価格」は、「それを獲得しようとするにあたって真に費やさせる（cost）もの」と言い換えられるもので、そこでの「費やさせるもの」という表現は、それに続く記述からみて、内容上「労苦と骨折り」を意味する。スミスは、

この表現において「労苦と骨折り」（＝労働）を一種の費用（cost）として捉えているとみることができる。そこでスミスがいう「労苦と骨折り」は「投下される労働」という意味で使用されているのではなく、一種の生産費的な性質を持つものという意味を持たされている。「真実価格」の定義についてのこの文脈では、「労苦と骨折り」は「支配労働」の意味を持っていることになる。通常、「投下労働」が問題になるのは、価値の源泉が考えられている場合であり、それは対象化された労働としての「投下労働」のことである。ここでのスミスの「真実価格」の定義においては、価値の源泉が問題になっているのではなく、交換価値の真の尺度、すなわち、「真実価格」が何に存在するかが問題になっているのであり、ここでのスミスの「真実価格」の定義に投下労働＝価値源泉説が存在するとみる見解には論拠はない、というわけである<sup>19)</sup>。また、越智（1998）によれば、スミスの「価値」論には、商品に投下された（＝対象化された）労働が商品の価値を決定するという理論、商品に投下される労働が商品の価値を決定するという理論としての「投下労働価値」論は存在しない、ともされる<sup>20)</sup>。越智の場合も、事実上、価値の尺度、価値の源泉、価値の決定は、別個の問題として扱われているといえる。

渡辺（2010）は、第5章の第1、第2段落は真の価値尺度としての支配労働（購買または支配しうる労働）を論じるものであり、商品価値の説明原理としての投下労働価値説は明示的には論じられていない、とみる。そして、「労苦」としての労働や「購買貨幣」としての労働といった第2段落にみられる見方は、商品所有者の意識に現象してくる「労働」観を表現したものの、とされる<sup>21)</sup>。渡辺は、事実上、スミスの議論における価値尺度の問題は、商品価値の説明原理（商品価値の因果的説明）の問題と別箇な問題として取り扱っているのである。

19世紀末から1970年代末の欧米の諸研究については、一方での、価値尺度には、価値の内在的尺度と価値の外在的尺度という二つの、異なった意味合いがあるという認識に立ちつつ、そのようなこととの関連で、スミスの議論における「投入された労働」と「支配される労働」との混乱・混同等といったことを論じるもの、他方での、「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」とは別個な問題であるという認識に立ち、そして、スミスの議論では「支配される労働」が価値尺度とされ、「投入された労働」が初期未開の社会状態での価値の因果的説明を与えるものとされている（そして、資本蓄積と土地占有の行われる社会状態については生産費説が考えられている）とみるといったものが、対極なしているといえる<sup>22)</sup>。

それに対し、カーリル（1991）は、前でもみたように、古典派の枠組みでは、価値尺度と価値理論との区別はなく、また、その同一視は誤ったものでもなく、価値の理論と価値の尺度との区別が求められる新古典派的枠組みからは、スミスの議論を正当に扱えないともみていた。

そのような新古典派的枠組みという点からいえば、19世紀末から1970年代末の欧米の諸研究中にはそのような枠組みからのものといえる研究が多々あった。また、本稿注10を含め前でもみたように、事実上、古典派の時代にありながら価値尺度の問題と価値の因果的説明の問題とを区別するベイリー（1967; 1825）といった見方が、リープクネヒト（1902）、サウエル（1974）によって示されるのであった。

しかし、他面で、例えばマルサスは、『経済学原理』第2版（1836）で、価値の尺度の研究は価値の原因（causes）の研究と同じものではない、とする。そして、商品中にくわえられた労働（the labour worked up in a commodity）はその商品の価値の主要な原因（principal cause）で、商品が支配するであろう労働はその商品の

価値の尺度、とする<sup>23)</sup>。また、ミルは、「価値の尺度」という概念は価値の規制者もしくは決定原理という概念と混同されてはならず、それら二概念を混同するのは、温度計と火との間の違いを見落とすのとほとんど同じことである、としている<sup>24)</sup>。

そして、新古典派的枠組みからのものともみえない日本の前出羽鳥（1990）等の場合にも、事実上、スミスの議論における価値尺度の問題と価値の因果的説明の問題とは別個な問題という認識に立って議論が展開されているわけである。

#### 4. 交換価値の論究計画

スミスは、『国富論』第1篇第4章末（WN I. iv.12-18（大河内訳I，49-51頁））で、交換価値の論究計画を示す。その際スミスは、事実上、財貨の交換価値（相対価値）の決定（determination）の検討という問題を、財貨と貨幣との交換また財貨と財貨との交換に際して人々が自然にまもる原則（rules）の検討として捉える。そしてスミスは、いわゆる「価値のパラドックス」を例にあげ、「使用価値」と、対象物の所有がもたらす他の財貨に対する購買力としての「交換価値」とを区別したうえで、諸商品の交換価値を規制（regulate）する原理（principles）を究明するために、この交換価値の真の尺度（real measure）は何か、商品の真実価格（real price）は何にあるか、を第5章で、商品価格の構成部分を第6章で、商品の自然価格と市場価格を第7章で、論じるとする。スミスは、第1篇第4章で、貨幣の起源と、それが商業の普遍的用具となってきた過程を論じ、そのうえで、その第4章末で、第5、第6、第7章において交換価値の問題を取り扱うとし、そして、商品の交換価値を規制する原理を究明するために、第5章では、この交換価値の真の尺度は何か、商品の真実価格はどこにあるか（スミスの場合、

「真実価格」は、真の尺度で表示された交換価値としての真実の交換価値)、を明らかにしようとするのである<sup>25)</sup>。

スミスの場合、貨幣で表示された「名目価格」・「名目交換価値」も、生産された一商品としての貨幣(金銀)で表示されたものという意味で、相対価値・相対価格であり、真の価値尺度としての後で言及される労働で表示された「真実価格」・「真実交換価値」も、一商品としての労働で表示されたものという意味で、相対価値・相対価格である。また、事実上、市場で取引される各商品は、価格(相対価格・相対価値)を持ち、そしてそれらの商品価格の逆比率が商品間の交換比率ということになる。事実上、真の価値尺度は、個々の商品の真実交換価値を表示しうる尺度、その尺度で表示された真実交換価値の逆比率で個々の商品が相互に交換されている尺度、ということになっており、そこでは、価値尺度によって各商品の交換価値の大きさが把握され、その交換価値の逆比率が交換比率となっているのである<sup>26)</sup>。そして、価値尺度は交換価値の大きさを表示するものであり、当該商品の交換価値が何故それだけの大きさのものになるのかを決定・規制するものが交換価値を規制する原理なのである。スミスの場合、価値尺度の問題と価値の規定(決定)とは、上のような関係にあるものであるとともに、問題としては別個な問題なのである。

## 5. 支配労働尺度採択の論理：第1段落

上の論究計画を受けて展開される第5章冒頭に示されるのが、本稿1で引用された第1段落である。

筆者は、その文言を以下のようなものとして理解する：

①人の貧富は享受可能な必需品、便益品および娯楽品の多少による。富(wealth; rich)の

内容は必需品、便益品および娯楽品であり、それらの品の量の大小が富の大小を意味する。②だが、分業が徹底的に行きわたるようになったあとの社会では、各人は各々一定の商品の生産に専念するため、生活のために自分が必要とする諸財貨すべては自給できず、たとえ自給できるとしても、その小部分にすぎないこととなる。③その社会では、各人が必要とする諸財貨の大部分を他人の生産した生産物の形で入手することになる。人の貧富は享受可能な必需品、便益品および娯楽品の多少を意味するのであるが、この事情から、人の貧富は、それらの財貨を生産する他人の労働に対する支配力の大きさの大小を意味することになる。④上の事情から、その社会では、商品の交換価値は、その所有者にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しいということになる。⑤このような事情から、その社会では、労働支配力としての労働が、商品の交換価値(他商品に対する支配力)の真の尺度となる(番号は本稿1中の引用文に付した番号に対応)。

スミスはそこでは、分業(商品生産者間の社会的分業)が行きわたるようになったあとの社会——スミスが第4章冒頭で言及している「商業的社会」<sup>27)</sup>——での、他人の労働に対する支配力に応じての人の富裕の程度(必需品・便益品・娯楽品を享受できる程度)ということに言及しつつ、そのような社会での各商品の交換価値(他財貨に対する購買力)が意味することという視点から、支配労働尺度という考えを提示しようとしている。分業・交換社会としての「商業的社会」において、商品の他商品に対する購買力が真に意味することという視点から、つまり、そのような社会では、商品の労働支配力が、当該商品の他商品に対する購買力を意味することになる、ということから、真の尺度としての支配労働尺度という考えを提示するので

ある。

議論のこの展開様式は、スミスの基本的な思考様式に沿ったものである。

スミスは『国富論』「序論および本書の構想」冒頭で、「国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを本来的（originally）に供給する源（fund）であって、この必需品と便益品は、つねに、労働の直接の生産物であるか、またはその生産物によって他の国民から購入したものである。／したがって、この生産物またはそれで購入されるものの、これを消費するはずの人々の数に対して占める割合が大きい小さいかに応じて、国民が必要とするすべての必需品と便益品が十分に供給されているかどうかが決まるであろう」（WN [I].1-2（大河内訳I，1頁）。／は原文改行箇所）と述べる。そして、第5章での議論を、「人が富んでいたり貧しかったりするの、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる」という文章からはじめる。前者は一国、後者は個人に関するものであるが、生活の必需品、便益品（および娯楽品）という富の豊富さ、富裕ということが、スミスにとっての重要関心事なのである。

スミスの場合、労働が、生活の必需品と便益品のすべてを本来的に供給する源であり、対象物の「交換価値」はその対象物の所有がもたらす他の財貨に対する購買力なのであるが、分業が徹底的に行きわたるようになった社会（商業的社会）では、各人は、生活のために必要な諸財貨の大部分を、自分の労働生産物との交換で得られる他人の労働生産物に依存することになり、そこでは、商品が持つ他人の労働に対する支配力が、当該商品の他商品に対する購買力（当該商品の交換価値）を意味することとなり、他財貨に対する購買力としての商品の交換価値の大きさは、当該商品が持つ他人の労働に対する支配力の大きさによって表示されうる、とい

うことになる。この点からいえば、真の価値尺度としてのスミスのいう支配労働尺度は、分業が徹底的に行きわたるようになった社会（商業的社会）を反映する側面を持つ尺度、ともいえる。分業・交換社会としての商業的社会での交換価値は、他人の労働の生産物に対する購買力であって、その交換価値の尺度は、他人の労働に対する購買力、ということになるわけである。また、その尺度は、他財貨に対する購買力としての交換価値の大きさを測るとともに財貨に対する購買力の大きさとしての富の大きさを測るものでもある。一商品の労働支配力が大きければ大きいほど、その商品の交換価値は大きく、またその商品の所有者の富もそれだけ大きく、所有する諸商品が全体として持つ労働支配力が大きければ大きいほど、それらの商品全体の交換価値は大きく、またそれらの商品の所有者の富もそれだけ大きい、ということになる。またスミスは、例えば第3段落の最後部分で、「彼の財産（fortune）の大小は、……その財産で彼が購買または支配しようところの、他の人々の労働の量、または同じことであるが（what is the same thing）他の人々の労働の生産物の量、に正確に比例する。あらゆる物の交換価値は、その所有者にもたらされるこの力の大きさに常に正確に等しいにちがいない」とも述べる。そこでの交換価値は、他財貨に対する購買力であるが、それは、交換比率というよりも、加算可能なものである。

なお、例えばリカードとマルサスは、第1段落冒頭①文の、「人が富んでいたり貧しかったりするの、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる」というスミスの文言を「富」の内容を指すものと捉え、一方のリカードは、価値と富（riches）とは本質的に異なる——価値は生産の難易に依存するのであって、豊富ということに依存するのではない——とする。そして、他方のマルサ



スは、もし、上の事物が自然に豊富に存在する際には、交換価値を持つものを所有しなくとも豊かでありうるのであって、そこでは、富(wealth)は交換価値となんの関係もないということになるが、現実の状態では、富と交換価値は同じものではないとしても、近い関係にありうる、とする<sup>28)</sup>。彼らに先行するスミスは、第1段落で、前のような論理で、真の価値尺度としての支配労働尺度という考えを、富・富裕との関連から提示しようとするのである。そして、そのような価値と富との関係といったことは、例えば、異時点間比較に際して、困難な問題を提出することになるものでもある。

筆者は、中川(2022)において、『国富論』第1篇第5章は価値尺度の問題を扱い、その議論は、一時点における価値測定に関わるもの(第1－第6段落)、異時点間における価値測定に関わるもの(第7－第22段落)、現実社会での現実の取引で機能している尺度および貨幣の制度に関わるもの(第23－42段落)から構成されている、という捉え方を提示した。ここで扱っている第1段落は、一時点における価値測定に関わるものであり、価値の異時点間比較といったことには言及していない。そこでスミスの念頭にある交換は、事実上、ある所与の時と場所における交換であり、そこでは、事実上、商業的社会での、所与の時と場所における富裕・富の大きさ、商品価値の大きさ、といったことが論じられているのである。その限りにおいては、労働支配力の大小＝交換価値の大小＝富の大小という関係そのものには、論理上特段の問題はないはずである<sup>29)</sup>。

他方、筆者は、この第1段落での議論の中に、スミスの議論における価値の源泉(原因)を考えるための糸口がある、とみる。

なお、ミーク(1973; 1956)によれば、『国富論』での価値の議論は、もっぱら社会的分業を問題にする第1篇第2章および第3章での分析

の中からはじまり、商品が価値を得るのはその商品が社会的労働の生産物であるからであるといった形で、価値の「源泉(source)」または「原因(cause)」を確定した、とみられる。スミスは事実上、第1篇第2章と第3章での社会的分業の分析中で価値の原因を確定しており、商品が価値を得るのはその商品が社会的労働の生産物であるからと考えている、とみられるのである<sup>30)</sup>。筆者も、別個な問題としての価値の原因の問題と価値の規定(決定)の問題という把握は可能と考える。また、それらの問題(価値の因果的説明の問題)と別箇な問題としての価値尺度の問題という把握は可能、そして、スミスの場合にも、価値尺度と価値規定とは別個な問題として構想されていた、とみる。そのうえで筆者は、価値の原因および尺度に関するスミスの把握様式は事実上次のようなものとみる。

すなわち、『国富論』の冒頭に「国民の年々の労働は、その国民が年々消費する生活の必需品と便益品のすべてを本来的に供給する源(ファンド)である」という文言が示される。スミスの場合、基本的に、必需品・便益品・娯楽品を供給する源(ファンド)となるものは、それらのものの生産に投入される労働である。そして、生産物の相互交換が行われる時、生産物の交換価値という観念が発生する。そこでは、相互交換用生産物の生産に労働が投入されることによって、交換価値という事象が生起し、その意味で、相互交換される生産物(商品)の生産に投入された労働が、生産物(商品)の交換価値の原因ということになる。そして、分業・交換社会としての商業的社会においては、富の大きさ(必需品・便益品・娯楽品の多さ)および交換価値の大きさ(他の財貨に対する購買力の多さ)は、他人の労働に対する支配力によって測定される。そこでは、富の大きさ、その富が持つ価値(交換価値)の大きさの尺度となるもの、また、その富を構成する個々の商品が持

つ価値（交換価値）の大きさの尺度となるものは、その社会の分業・交換体系の中に組み込まれている労働に対する支配力ということになる、というわけである。

## 6. 「労苦と骨折り」による支配労働尺度 採択への支持：第2段落

第1段落で上のような論理から支配労働尺度を採択したスミスは、第2段落でその選択への支持論を展開する。筆者は、本稿1でみたその第2段落でのスミスの文言を、以下のようなものとして理解する：

①事物を獲得しようとする人が真に費やすものの、その事物の真の代価は、その事物を獲得するための労苦と骨折りである。事物の究極の費用は、その事物を獲得するための労苦と骨折りである。②それゆえ、所有者にとっての事物の真の値打ちは、その事物をすでに所有しているために自分で引き受けずにすむ労苦と骨折り、あるいはまた、その事物と交換に支配できる他人の労苦と骨折りである。③我々が自分の労苦と骨折りによって、すなわち、自分の労働によって事物を獲得する場合と同じように、我々が貨幣または財貨を支払って購買するものも、（我々の労働の結果として得られた貨幣または財貨を支払って獲得しているという意味で、）労働によって購買しているのである。④その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、その貨幣やそれらの財貨で獲得するものを自分で生産して獲得するための労苦を我々から省いてくれる。⑤その貨幣やそれらの財貨は、ある一定量の労働の価値を含んでおり、我々は、その一定量の労働の価値を、その時、それと等しい量の価値を含んでいるとみなされるものと交換しようとする（その時、我々は、納得して交換に臨む）のである。⑥・⑦一般的に、財・商品・富は、労苦と骨折りとしての労働の投入という代価を

払うことによって、はじめて、生産・獲得が可能になる。⑧労働はそのような本質の意味を持つものであり、そのような労働に対する支配力こそが、人々にとって、財・商品・富の価値についての納得的な尺度でありうるのである（番号は本稿1中の引用文に付した番号に対応）。

筆者のみるところでは、スミスは、第1段落に示されるような論理から財生産力としての労働に対する支配力を商品の交換価値の真の尺度と考えるのであるが、この第2段落で、「労苦と骨折り」という視点から、その選択を支持するための議論を展開するのである。

第5、第6段落の議論が示しているように、スミスの目からしても、真の価値尺度としての支配労働尺度といった考えそのものは、多くの人にとって簡明なものではない。スミスはこの第2段落で、交換当事者の心理を説明するといった心理分析を提示しつつ、「商業的社会」の構成員たち（地主、資本家、労働者、独立生産者たち）にとって、労働に対する支配力が納得のいく真の価値尺度であるはずであることを示そうとするのである。

確かに、第2段落の文言には、投下労働量による商品価値規定の考え（リカードウ）を思わせるようなものがある。また、価値の実体をなし・価値を規制し・価値を内在的に較量しうる尺度といった意味での「価値の内在的尺度」という考え（マルクス）を思わせるようなものもある。

それに関連して、例えば、羽鳥（1990）と小沼（1983）は、第2段落中に投下労働＝価値源泉説をみようとする<sup>31)</sup>。他方、越智（1998）の場合は、第2段落中に投下労働＝価値源泉説をみる見解は否定される<sup>32)</sup>。また、渡辺（2010）の場合は、第1、第2段落では商品価値の説明原理としての投下労働価値説は明示的には論じられていないとみられるとともに、「労苦」と

としての労働や「購買貨幣」としての労働といった第2段落にみられる見方は、商品所有者の意識に現象してくる「労働」観を表現したものとされる<sup>33)</sup>。

なお、上の諸論者は、第1、第2段落に関して、投下労働量による商品価値規定と支配労働量による商品価値規定との混乱、価値の内在的尺度と価値の外在的尺度との混乱といった見方をとらず、各々上のような見方をとりつつ、基本的には、そこでのスミスの議論を矛盾のないものと捉えようとするわけであるが、例えば、オドーネル(1990)は、価値尺度の問題を扱う第5章の、第1－第7段落は前資本主義経済に関連する議論で、第1－第3段落では「あらゆる物の真実価格、すなわち、あらゆる物がそれを獲得しようとする人に対して真に費やさせるものは、それを獲得するための労苦と骨折りである」という「真実価格」の定義が採択され、またそこでは、「体化労働」と「支配労働」との両方のことがいわれていた——より正確には、この段階では、一商品の生産に費やされた労働(「体化された労働」)の量と一商品が支配する財貨のなかに体化された労働の量とが区別されていなかった——とみるとともに、そのような前資本主義的交換経済においてはそれら二つの労働量は等しくなる、とする<sup>34)</sup>。

以上の諸解釈に対し、筆者は、交換価値の源泉・原因の問題、交換価値の規制・決定の問題、交換価値の尺度の問題は別個な問題という把握は可能であり、そして、スミスの場合、第5章の分析対象となる社会は資本主義社会と重なる要素を多く持つ「商業的社会」であり、その社会での交換価値の分析では、事実上、交換価値の原因は、社会的分業のもとでの生産に投入された労働に求められ、また、交換価値の尺度の問題は、交換価値の決定の問題と別個な問題として論じられている、とみる<sup>35)</sup>。そして、筆者のみるところでは、真の価値尺度としてのスミ

スのいう支配労働尺度は、分業が徹底的に行きわたるようになった分業・交換社会としての商業的社会における富、交換価値といった論理から導出されるものであり、その尺度は商業的社会を反映する側面を持つ尺度なのであるが、スミスは第2段落では、労働することの肉体的疲労としての労苦・骨折り、そのような労苦・骨折りを意味する労働に対する支配力という側面から、真の価値尺度としての支配労働尺度という考えを、人々にとってより納得のいくものとして示そうとしているのである。

スミスは、財生産力としての労働が同時に意味する労働することの肉体的疲労としての労苦・骨折り、そのような労苦・骨折りをも意味する労働に対する支配力による評価には、人々の一般的な納得が得られるはず——スミスが事実上想定している商業的社会の構成員としての、地主、資本家、労働者、独立生産者たちの間には、とりわけ後者の三グループの間には、物質的にも精神的にも相互の流動性が多く残り、彼らの間では、精神的な立場の交換の容易さが確保されており、労働することの肉体的疲労としての労苦・骨折りといったことは、想像・推測可能、共有可能——と考えるわけである<sup>36)</sup>。

## 7. 「商業的社会」での富および真の価値尺度の確認：第3段落

スミスは『国富論』第3版で、以下でみる第3段落を追加する。そこでは、スミスは、事実上、富は力であるが「商業的社会」での富が直接的にもたらす力は、市民的あるいは軍事的な政治権力ではなくて、他人の労働に対する支配力・他人の労働の生産物に対する支配力であるという点から、「商業的社会」での交換価値の真の尺度としての労働支配力という考えの妥当性を確認しようとする。

ホブズがいうように、富(wealth)は力(power)である。ただし、大きな財産(fortune)

は、その所有者に市民的・軍事的な政治権力獲得の手段を提供するとしても、その所有者はその所有の故に、自動的にその市民的・軍事的な政治権力を獲得するというわけではない。所有者がその所有の故に直接的に獲得する力は、その時に市場にあるすべての労働、あるいはすべての労働生産物に対する一定の支配力である。その所有者の財産の大小は、この支配力の大小に比例する。すなわち、その財産で購買・支配しうる他人の労働の量、または、同じことであるが（what is the same thing）他人の労働の生産物の量に比例する。「あらゆる物の交換価値は、その所有者にもたらされるこの力の大きさに常に正確に等しいにちがいない」、というわけである（WN Lv.3（大河内訳I, 54頁）<sup>37)</sup>。

小沼（1983）によれば、スミスの議論では「商業社会」は、生産要素が労働のみの単純化された商業社会（初期未開の社会状態・独立生産者社会）と三生産要素を考慮した商業社会とが考えられており、第5章第1、第2段落では「初期未開の社会状態」が想定され、第1段落で支配労働価値尺度説の提示、第2段落で投下労働＝価値源泉説による支配労働＝価値尺度説の基礎づけがなされ、第3段落で、労働市場の成立と賃金労働者の存在を想定したうえで、三生産要素を考慮した商業社会でも、支配労働＝価値尺度説が成立することの確認がなされるのであり、スミスが第3版でこの第3段落を追加した狙いはこの点にあった、とみられる<sup>38)</sup>。

他方、カーリル（1991）の場合は、第3段落はホッブズの段階よりも文明化が進展し分業の発達した社会を論じるとしても、その第3段落を含め、第5章の文脈そのものは、非資本主義的交換の文脈である（利潤、地代なし）。そして、第3段落中に言及される事実上の「支配しうる生きた労働」は、資本主義的交換での賃金労働でなく、労働者が労働の全生産物を報酬として受け取る「手間賃労働」とも呼べるもので

あり、そこでは、交換価値の尺度としての支配労働は、当該商品によって購買されうる「他の商品に体化された」労働でも当該商品によって購買されうる「生きた」労働でも同一の意味を持つ、ということになるのである<sup>39)</sup>。

上のものに対し、筆者のみるところでは、第5章の分析対象となる社会は資本主義社会と重なる要素を多く持つ「商業的社会」である。そして、スミスは第1段落で、分業・交換社会としての「商業的社会」での富、交換価値という論理から、真の価値尺度としての支配労働尺度という考えを提示し、第2段落で、「商業的社会」の構成員からの共感を得られるであろう、労働することの肉体的疲労としての労苦・骨折り、そのような労苦・骨折りを意味する労働に対する支配力という側面から、真の価値尺度として支配労働尺度を採択することに対する支持を与えようとした。そして、第3段落で、事実上、ホッブズの名をあげつつ、研究対象としての「商業的社会」では、富の内容は、他人の労働・他人の労働生産物に対する支配力であり、富の大小は、他人の労働・他人の労働生産物に対する支配力の大小を意味するという側面から、あらためて、分業・交換社会としての「商業的社会」における、交換価値の真の尺度としての労働支配力という考えの妥当性を確認しようとしているのである。

そして、スミスがそこで考えている交換価値の真の尺度としての労働は、事実上、財生産力としての労働であり、現在の労働・生きた労働・これから行われる労働である。また、生産物の労働支配力（生産物によって支配される労働量）そのものは、生産物の名目価格（生産物の貨幣価格）を名目賃金率（貨幣賃金率）——「労働の時価」——で割ることによって算出されるものなのである。



## 8. 結 論

『国富論』第1篇第5章は主に価値尺度の問題を扱い、その議論は、一時点における価値測定に関わるもの（第1－第6段落）、異時点間における価値測定に関わるもの（第7－第22段落）、現実社会での現実の取引で機能している尺度および貨幣の制度に関わるもの（第23－42段落）から構成されている。そして、その第5章での分析の背景となっている社会は、資本主義社会と重なる要素を多く持つ「商業的社会」であり、その第1段落から第6段落は、事実上、所与の時（と場所）における交換、そこでの価値の測定を扱うのであるが、本稿で筆者は、基本的に、価値の原因の問題、価値の決定の問題、価値尺度の問題はそれぞれ別個な三つの問題との把握は可能という認識に立ち、スミスの議論における「価値の因果的説明の問題」と「価値尺度の問題」という点に留意しつつ、以下のような点を明らかにした。

第4章末の交換価値の論究計画からみて、スミスの場合、尺度は、交換価値決定を研究するための、交換価値の大きさを測定・確認する尺度と考えられており、交換価値の決定の問題と交換価値の尺度の問題は、関連はあるが別個な問題となっている。

第5章第1段落は、「商業的社会」での交換価値の尺度としての支配労働尺度の論理を、富との関連で、提示している。またそこには、「序論および本書の構想」冒頭の文言との関連で、富の原因また交換価値の原因としての、生産に投入された労働に関するスミスの考えが看取できる。

第2段落は、労働することの肉体的疲労としての労苦と骨折りといった側面から、支配労働尺度採択への支持論を提示する。それは、投下労働＝価値（規定）説、投下労働＝価値源泉説を意味するものではない。

第3段落は、第1段落で提示された考え、「商業的社会」での富、交換価値、真の価値尺度に関する考えを再確認する。

なお、スミスは、以上の議論に続いて、そのような支配労働尺度を使用する際の問題点として異質労働の問題に言及し（第4段落）、また、現実におけるより簡明な尺度としての、特定商品さらに貨幣ということに言及するのであるが（第5－第6段落）、それら第1段落から第6段落では、事実上、所与の時（と場所）における測定が考えられている<sup>40)</sup>。そこでは、測定対象としての生産物の物量とその生産物物量が支配しうる労働量との間の比例性といったことは問題にならない。そのことが問題になるのは、異時点間比較においてである。そこでは、支配しうる生産物物量としての「真実価格」、支配しうる労働量としての「真実価格」、あるいはまた、富と価値、といったことが問題となりうる。そして、スミスが、第7段落から第22段落で取り組もうとするのが、まさしくこれに関わる問題なのである。

## 注

- 1) Ricardo (1951; 1817), pp. 12-14 (邦訳, 15-16頁) を見よ。
- 2) ダグラス (1927), ロビンズ (1958), スピーゲル (1971) 等。中川 (2016), 173-76頁を見よ。中川 (2016) での指示箇所から、中川 (2010), 中川 (1995a) および中川 (1995b) での関連箇所をたどれる。以下、同様。
- 3) Marx (1965-68), Bd. 26.1, S. 121 (邦訳 I, 158-59頁)。
- 4) ローゼンベルク (1935; 1934), ロール (1938), ベーレンス (1962), デュモン (1977) 等。中川 (2016), 108-10, 168-72頁を見よ。
- 5) Meek (1973; 1956), pp. 63-64, 64n. 1, pp. 66-68 (邦訳, 70-72, 75-77頁) を見よ。
- 6) Schumpeter (1954), p. 590 (邦訳, 第4分冊, 1240-41頁)。
- 7) Meek (1973; 1956), pp. 62-63, 62n. 3 (邦訳, 69-71頁), また、中川 (2022), 22-23頁, 31-32頁注8を見よ。
- 8) Wieser (1889), Vorwort, S. III-IV (邦訳, 「原著者序」, 12-13頁)。
- 9) Liebknecht (1902), S. 20-25 (邦訳, 45-55頁)。

- 10) Sowell (1974), pp. 99–100, 103, 110–11. リーブクネヒト (1902) も、「ベイリーは彼の論文 [Bailey (1967; 1825)] の第二の部分 (第10, 第11章) において、なにかんずく、従来経済学者たちによって全く許容できない形でごちゃまぜにされて同義のものとして取り扱われていた『価値の尺度 (Wertmass; measure of value)』と『価値の原因 (Wertursache; cause of value)』という概念の厳格な区別をなす」との指摘をなしていた。Liebknecht (1902), S. 58 (邦訳, 127頁)。〔 〕内は中川。
  - 11) Dobbs (1973), p. 47 (邦訳, 63–64頁)。
  - 12) 以上のような諸類型、および、諸類型中の諸論者の個々の議論については、中川 (2016) 第Ⅱ部第3章を見よ。それら諸類型にみられる諸接近様式と共通する要素を持つが、同時に異なる要素を持つものもある。それについては、中川 (2016), 143, 149頁を見よ。
  - 13) なお、リカードウの『経済学および課税の原理』(初版1817年) 第1章に、第6節「不変の価値尺度について」が新設されたのは1821年の第3版において。
  - 14) O'Donnell (1990), pp. 72–73を見よ。
  - 15) 例えば、Khalil (1991), pp. 40–41を見よ。
  - 16) Hueckel (2000a), pp. 318–21を見よ。
  - 17) 羽鳥 (1990), 53–58, 65–68頁を見よ。
  - 18) 小沼 (1983), 42–45頁を見よ。
  - 19) 越智 (1998), 109–12頁, 130頁注3を見よ。
  - 20) 越智 (1998), 109–19頁を見よ。
  - 21) 渡辺 (2010), 47–51, 53–57頁を見よ。
  - 22) 中川 (2016), 466–67頁。
  - 23) Malthus (1974; 1836), p. 83, incl., n.
  - 24) Mill (1926; 1848), p. 568 (末永訳, 第3分冊, 251–52頁)。
  - 25) より詳しくは、例えば、中川 (2022), 17–18頁, 31頁注3を見よ。スミス『法学講義』B ノートでの価値のパラドックスへの言及については、中川 (2022), 18頁を見よ。
  - 26) 中川 (2022), 31頁注3, また、中川 (2016), 581–83頁, 704–5 頁注20を見よ。
  - 27) スミスのいう「商業的社会」についての筆者の理解に関しては、中川 (2020) を見よ。また、本稿で言及しているカーリルおよび小沼の理解、そして、小林の理解に関しては、中川 (2020), 5–6, 14, 17–18頁を見よ。なお、越智 (1998) は、スミスの「商業社会」に関する諸解釈 (1973年から1987年) を例示している。そして、例えば、スミスの「商業社会」(商業的社会) を、独立生産者のみが形成する満開した商品生産の社会とみる解釈 (小林), それを否定し、「資本・賃労働関係が生成・展開している」社会とみる解釈 (羽鳥: 本稿3), また、「抽象的で純粹に論理的な社会概念」で「一つのフィクション」とみる解釈 (酒井進) その他の解釈を紹介し、そして、「商業社会」を、スミスが彼の人間本性論に基づいて社会を把握した結果、生み出された概念、理論的なモデルとみる自らの解釈は、酒井の解釈に近い、として
  - いる (越智 (1998), 65–70頁, 73–74頁注10を見よ)。
  - 28) Ricardo (1951; 1817), p. 273 (邦訳, 315頁)。Malthus (1820), pp. 337–38 (邦訳下, 141頁)。Malthus (1974; 1836), p. 299. なお、リカードウは、商品、その交換価値、その相対価格を規制する法則を論じる際、人間の勤労の行使によって分量を増加させることができ、またその生産には際限なく競争の行われるような商品のみを考える、とする (Ricardo (1951; 1817), p. 12 (邦訳, 14頁))。スミスは、例えば、「年々の生産物の全体は、大地の野生の産物を除けば、すべて生産的労働の成果」とする (WN II.iii.3 (大河内訳 I, 519頁))。また、マルクスの場合は、富 (Reichtum) の素材的内容をなすのが使用価値であり (Marx (1974; 1867), Bd. 1, S. 50 (邦訳, 第1巻第1分冊, 48–49頁)), その意味で、富と価値の関係は、使用価値 (富) と価値ということになる。
  - 29) 異時点間における価値と富といったことを含め、「価値と富」については、別の機会に取り扱いたい。なお、例えば小沼 (1983) は、第5章第1段落①文から③文の部分は、「富の視点」から富裕度の尺度を論じるものであり、④文から⑤文の部分は、「価値の視点」から商品の交換価値の尺度を論じるものであって、前者では支配労働量が富裕度の尺度、後者では支配労働量が商品の交換価値の尺度という考えが示されている、とみる。そして小沼は、異なる概念としての富と価値という観点から、前者の議論と後者の議論が「したがって (therefore)」という接続詞で結ばれることに否定的な見方をとる (小沼 (1983), 29–33頁, 32頁注16を見よ)。
- 他方、渡辺 (2010) は、第1段落の④文と⑤文中の真の価値尺度としての支配労働は、生きている (他人の) 労働 (= 商品として市場に存在する労働) とし、また、第1段落の①文から③文との関連で、第5章の記述を読む限り、スミスは「富」と「価値」を同一視していないのであり、スミスが考えていた富裕 (富) の基準は、個人が購買しうる「他人の生産物」の量でも、「他人の生産物に含まれる労働」の量でもなく、その時点で、それを生産するのに必要とされる「他人の労働」の量であるとする (渡辺 (2010), 48–49頁)。筆者は、スミスの議論における尺度としての支配労働は、生きている労働・現在の労働・これから行われる労働であり、その支配される労働の量そのものは、例えば第5章第22段落での、支配労働量を尺度とする際の要件としての「労働の時価 (the current prices of labour)」に関する情報ということへの言及からみて、測定対象物の名目価格 (貨幣価格) を名目賃金率 (貨幣賃金率) で割ることによって算出されるもの、とみる。そして、第5章第1段落の真の価値尺度としての支配労働 (購買または支配しうる労働) も、渡辺と同様、生きている (他人の) 労働 (= 商品として市場に存在する労働) とみる。しかし筆者は、スミスがそこで考えている富裕 (富) の基準としての労働も、

上と同様の意味での支配労働、とみる。

なお、カーリル (1991) は事実上、スミスは第5章第1段落で、富の尺度として、当該人物の所有する生産物、および、当該人物の所有する生産物の支配しうる労働 (交換価値) という二つの尺度について述べた、とみる (Khalil (1991), p. 42 を見よ)。

- 30) Meek (1973; 1956), pp. 60-62 (邦訳, 66-69頁) を見よ。
- 31) 本稿3を見よ。なお、小沼 (1983) によれば、『国富論』第1篇第5、第6、第7章で想定されていた社会は、第4章冒頭で提示される「商業社会」であり、また、その「商業社会」は、生産要素が労働のみの単純化された商業社会 (初期未開の社会状態・独立生産者社会) と三生産要素を考慮した商業社会とが考えられている、とされる (小沼 (1983), 26-29, 30, 39頁を見よ)。そして、小沼は、第5章第1、第2段落は、事実上、初期未開の社会状態の想定もとの議論と捉え、第2段落でのスミスの議論については、本稿1で引用された第2段落の①文と②文の部分 (第1部分)、③文から⑤文の部分 (第2部分)、⑥文から⑧文の部分 (第3部分) の三つの部分に分けて検討するのであるが、例えば、第1部分でスミスは、投下労働=価値源泉説の提示によって、第1段落に示された支配労働=価値尺度説を基礎づけようとした、とする。また例えば、第3部分での「最初の代価」、「本源的購買貨幣」としての労働といった表現は、人間と自然との間の物質代謝の過程を、商品交換の過程として擬制化して表現したもので、本来、世界の最初の富は、人間が自然に対して、toil and trouble を伴う労働を投下することによって獲得したものということを示そうとしているもの、とする (小沼 (1983), 29-38頁を見よ)。なお、小沼は、第3部分中の、「世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである」は、『政治論集』(1752) 巻頭の論考「商業について」中のヒュームの「世界のあらゆる物は、労働によって購買される」という言葉を受けてのもの、とする (小沼 (1983), 37頁, Hume (1964; 1882; 1752), p. 293 (田中訳, 12頁) を見よ。渡辺 (2010), 55-56頁, WN (Iv), p. 47 Editors' note 5 も見よ)。
- 32) 本稿3を見よ。なお、越智 (1998) の場合には、第2段落⑥文での、「本源的購買貨幣」としての「労働」という概念は、財貨獲得および貨幣獲得の過程の因果関係の分析を通じて得られた抽象的概念であり、そこでは、「労働」が歴史上の實在の本源的な貨幣と考えられているのではなく、理論上の世界での「本源的な」貨幣と考えられている、とされる (越智 (1998), 84-86, 90, 106-7頁を見よ)。
- 33) 本稿3を見よ。なお、渡辺 (2010) の場合には、スミスのいう「商業的社会」の生産基盤は、「農業」労働と「工業」労働と把握されるとともに、その「商業的社会」は、投下労働量によって商品交換が行われる「初期未開の社会状態」(第6章)

とは異なる、第5章冒頭段落の分業が徹底的に行きわたるようになった「商業的社会」、ともされる (渡辺 (2010), 56, 58頁)。そして、渡辺によれば、第2段落①文は、投下労働価値説を論じるものでなく、支配労働による真実価格の定義を述べ、商品所有者が、自分の商品と他人の他の商品との交換行為を決定づける行動の動機を論じるもの、②文は、その真実価格の定義を言い換えたもの、とされ (渡辺 (2010), 51-53頁)、また、スミスはそれらの箇所で、「労苦と骨折」という表現をとるのであるが、商品を獲得・生産して交換に参入する各生産者が、自分の商品を「獲得した」(生産した) ときの労働体験から、交換対象商品の生産者の労働を、「労苦」と感じるようになるのであって、ここでの「労苦」は、商品所有者の意識に現象してくる「労働」観を表現したもので、とされる (渡辺 (2010), 注12を含め53頁を見よ。なお、渡辺は、スミスにおける労働把握の諸側面の例をあげる。それについては、渡辺 (2010), 53-54頁を見よ)。また、③文から⑤文での議論そのものは、商品所有者が等量の「労働の価値」(真実価格) を持つ商品を相互に「等価」と認めたときに、商品交換が行われるということ述べているにすぎない、とされ (渡辺 (2010), 54-55頁)、そして、⑥文と⑦文に関連して、労働を本源的購買貨幣とみる「労働」購買貨幣説そのものは、スミスが商品所有者の意識に現象してくるものとして描写する「労働」観、とされる (渡辺 (2010), 注17を含め55-57頁を見よ)。渡辺は、第1段落と第2段落では商品価値の説明原理としての投下労働価値説は明示的には論じられていない、とするのである——同時に、例えば、その投下労働価値説は『国富論』体系全体を通して堅持されている、とする——(渡辺 (2010), 57-58, 59頁を見よ)。

- 34) オドネル (1990) の場合には、「価値の説明 (価値の因果的説明) の問題・価値理論の問題」と「価値尺度の問題」とは論理的に別個の問題であり、そして、スミスは「価値の説明」、「価値尺度」いずれの脈絡でも、「体化労働」と「支配労働」とを混同してはいなかったとされるわけであるが、その際、価値尺度の問題は主に第5章で扱われ、第5章の第1-第7段落は前資本主義経済に関連する議論、第8段落以下が資本主義経済に関連する議論、と捉えられる (本文中のことを含め以上の点については、O'Donnell (1990), pp. 63-67, 72-73を見よ)。

なお、カーリル (1991) の場合には、本稿3で触れたように、古典派の枠組みでは価値尺度と価値理論 (価値の因果的説明) との区別はなく、また、その同一視は誤ったものでもない。そして、第5章でのスミスの議論の暗黙裡の枠組みとなっている社会は、非資本主義的交換の行われる自営生産者たちの社会 (利潤、地代なし) で、その非資本主義的交換の脈絡では、「支配労働」は「体化労働」に等しく、また、スミスが「支配労働」を、諸財貨の真実交換価値の尺度とする際、「支



配労働」は、他財貨に「体化された労働」に対する支配力を通じてでも、非資本主義的な文脈での「購買される生きた労働」の用役に対する支配力を通じてでも、財貨の真実交換価値を測定することになっている（当該商品によって購買される労働そのものは、当該商品によって購買される「他の商品に体化された」労働でも当該商品によって購買される「生きた」労働でもありうる）のである（Khalil (1991), pp. 34-38, 45n. 1を見よ）。また、カーリルによれば、第5章で事実上の生きた労働に言及されるとき労働は、例えば家庭用庭師を雇うような最終的使用のために取引されるものとされ、その労働が、資本主義的交換での賃金労働との対比で「手間賃労働 (fee-labor)」と呼ばれる。第5章での生きた労働は、「手間賃労働」であり、その労働者はその労働の全生産物を報酬として受け取る、とされる（Khalil (1991), pp. 37-38, 45nn. 7-8を見よ）。なお、カーリルはまた、第2段落中の①文から⑤文を引用し、そこでは、三つのタイプの費用（労苦：toil）が考えられているとみる（詳しくは、Khalil (1991), p. 37を見よ）。なお、第2段落の諸文での交換参加者・商品・労苦と骨折りの関係に関しては、例えば、Cannan (1929), pp. 164-65, Meek (1973; 1956), pp. 67, 67-68n. 2（邦訳、注2を含め76頁）、渡辺 (2010), 51-57頁を見よ。中川 (1995a), 114頁, 115頁注2, 116-17頁, 214-15頁注9, 中川 (2010), 132頁, 146頁注16, 323-24頁注58も見よ）。

他方、ヒューケル (2000b) は、オドーネル (1990)、カーリル (1991) に対し、第4章第1段落でいわれている「商業的社会」はスミスの発展四段階説の最も進んだ段階（商業段階）にあたり、第5章第1段落はそれと同一の脈絡にあり、第5章の背景となっている経済は貨幣経済の真つただちにある経済、と捉える（Hueckel (2000b), pp. 467-71を見よ）。また、ヒューケル (2000a) は、スミスの議論における真の価値尺度を支配労働とみるとともに、価値の尺度と価値の「規制者 (regulator)」との間の違いをスミスは理解していたとみつつ、議論を展開する（Hueckel (2000a), pp. 318-21を見よ）。また、ヒューケル (1998) によれば、スミスは、努力の負の効用 (negative utility of effort) と消費からの正の効用を別のものとして扱い、彼の支配労働概念を努力の負の効用に関わるものとして構想している、とされ、その証左として第1段落④文および第2段落②文があげられる。それらの文言は、スミスが彼の支配労働概念を努力の負の効用にのみ関わるものと考えていることを示すもの、と捉えられるのである。また、ヒューケル (1998) は、スミスはそこでは、対象物の消費者の観点ではなく、商品を、生産的労働を雇う際の資本として使用する商人の観点をとっている、とする（ヒューケル (1998) はまた、以上のことから、スミスの支配労働単位が関係する厚生 (welfare) は、対象物の消費から直接的に得られる厚生ではなく、商人が、販売目的の商品

生産のために他人を雇うことによってその商人が回避しうる努力の不効用 (disutility of effort) である、とする。以上の点については、Hueckel (1998), pp. 217-18を見よ。なお、厚生水準およびその経時変化を測定するものとしてのスミスの尺度ということに関連する様々な解釈については、例えば、中川 (2016), 20-24頁も見よ）。

35) 筆者は、スミスの議論では、交換用財の生産に投入された労働は、事実上、交換価値の原因（生産物の原因であることによって生産物の交換価値の原因）であるとともに、投入労働量は、資本蓄積と土地占有に先立つ初期未開の社会では、商品の交換価値の唯一の決定因であり（WN I.vi.1-4）、資本蓄積と土地占有の行われる社会でも、商品の交換価値の決定に影響を及ぼすものである、とみる。ただし、『国富論』の諸所には、商品価値の変動を投入労働量の変動から説明する議論がみられるが、『国富論』では商品価値の説明原理としての投下労働価値説の妥当性は、「初期未開の社会状態」に限定されており、資本蓄積と土地占有の行われる社会状態については、商品価値変動への投入労働量変動の影響は、事実上、当該商品の需給関係への影響を通じて作用するものと解されうる、とみる（例えば、Nakagawa (2021a), pp. 13-21, 22-23, Nakagawa (2021b), pp. 5-7, 12-13を見よ）。

36) 中川 (2020), 10-12, 18-19頁を見よ。なお、筆者は、この第2段落での「労苦と骨折り」という表現と、後の第7段落での「安楽 (ease), 自由 (liberty), 幸福 (happiness)」の犠牲という表現とをスミスは使い分けている、とみる。『道徳感情論』第1部第2篇の第1章および第2章に示される用語でいえば、労働することの「労苦と骨折り」は「身体に起源を持つ諸情念」のうちに含まれ、労働に際しての「安楽, 自由, 幸福」の犠牲は、「想像力の特定の傾向または慣習に起源を持つ諸情念」に含まれるといえる。この点で、「労苦と骨折り」と「安楽, 自由, 幸福」の犠牲を一括して労働の不効用（負効用：disutility）と把握せずに、スミスはそれらの表現を使い分けているとみるほうが、スミスの考えに沿っていると考えられる。

37) ホブズは『リヴァイヤサン』第1部第10章で、「気前の良さと結び付いた富 (riches) は、力である」と述べている。Hobbes (1980; 1651), p. 150（水田訳I, 151頁）。

なお、スミスは、例えば、商工業のない国の領主は彼の余剰の大部分と交換できるようなものがないため、それを隷属者や食客に振舞い、それが彼の権威や武力の基盤になった、とするともに、外国貿易と製造業の活動の結果、領主の余剰が、外国貿易と製造業の提供する財貨の獲得に使用されることとなり、領主の権力と権威は掘り崩されていくこととなった、とする。また、ヨーロッパの現状では、一般に、労働者も雇用主も、生活維持という点では、大地主等の財産からは多かれ少



- なけれ独立的に、維持可能となっている、ともする (WN III. iv. 5, 10-11 (大河内訳Ⅱ, 53-54, 59-61頁). WN V.i.b.7 (大河内訳Ⅲ, 35-36頁) も見よ)。
- 38) 小沼 (1983), 40, 42-45頁を見よ。また、小沼によれば、この第3段落と第8段落が、第5章で労働市場の成立と賃金労働者の存在が想定されている箇所、とされる (小沼 (1983), 39-42頁)。なお、小沼 (1983) によれば、第1, 第2段落は初期未開の社会状態を想定し、第2段落で、投下労働=価値源泉説によって支配労働=価値尺度説が基礎づけられるのであるが、その支配労働=価値尺度説は、支配労働量と投下労働量とが一致しない資本蓄積と土地占有以後の社会でも妥当することになっているのであり、また、他方の投下労働=価値源泉説も、資本蓄積と土地占有以後の社会に関しては放棄されたというわけではなく、例えば第11章中でも主張されている (ここでは、投下労働量は、商品の交換価値を規制する諸要因のうちの一つ)、とされる (小沼 (1983), 42-45頁を見よ)。
- 39) またカーリルは、スミスの議論では事実上、富の交換価値は、所有する生産物の支配労働という尺度によって測定され、富の使用価値は、所有する生産物・支配しうる生産物という尺度によって測定されると考えられている、ともみる。本文中のことを含め、以上の点については、本稿の注29, 注34, Khalil (1991), pp. 41-44を見よ。
- 40) 中川 (2022), 19頁を見よ。
- 参考文献
- 越智良二 (1998): 『アダム・スミスの貨幣論の研究』, 青葉園書。
- 小沼宗一 (1983): 「アダム・スミスの価値尺度論」『東北学院大学論集 経済学』93, 23-51頁。
- 小林 昇 (1973): 『国富論体系の成立』, 未来社。
- 中川栄治 (1995a): 『「アダム・スミスの価値尺度論」に関する海外における諸研究——19世紀末から1970年代末——』(上), 広島経済大学研究双書第14冊, 広島経済大学地域経済研究所。
- (1995b): 『「アダム・スミスの価値尺度論」に関する海外における諸研究——19世紀末から1970年代末——』(下), 広島経済大学研究双書第15冊, 広島経済大学地域経済研究所。
- (2010): 『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析——基本的諸問題を巡って——』(上), 晃洋書房。
- (2016): 『「アダム・スミス価値尺度論」欧米文献の分析——基本的諸問題を巡って——』(下), 晃洋書房。
- (2020): 「アダム・スミスの「商業的社会」」『広島経済大学経済研究論集』43(2), 5-21頁。
- (2022): 『「国富論」第1篇第5章の構造』『広島経済大学経済研究論集』44(3), 17-34頁。
- 羽鳥卓也 (1990): 『「国富論」研究』, 未来社。
- ローゼンベルク, Д. И. (1935; 1934): 『経済学史』(第1巻) (直井武夫訳), ナウカ社, 1935年 (Давид Иохелевич Розенберг, История политической экономии, часть первая, Москва, 1934の邦訳: この邦訳での著者名表記はローゼンベルグ)。
- 渡辺恵一 (2010): 「スミス労働価値論の再読——商品価値の認識と実在——」『大阪経大論集』61(1), 47-62頁。
- Baily, S. (1967; 1825): *A Critical Dissertation on the Nature, Measures, and Causes of Value*, London: R. Hunter, 1825; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley. 鈴木鴻一郎訳『リカード価値論の批判——価値の性質, 尺度, 及び原因に関する論文——』, 日本評論社, 1941年。
- Behrens, F. (1981; 1962): *Grundrisse der Geschichte der politischen Ökonomie*, Bd. 1, *Die politische Ökonomie bis zur bürgerlichen Klassik*, 2., berichtigte und ergänzte Aufl. Berlin: Akademie-Verlag.
- Cannan, E. (1964; 1929): *A Review of Economic Theory*, 2nd ed., London: Frank Cass.
- Dobb, M. (1973): *Theories of Value and Distribution since Adam Smith: Ideology and Economic Theory*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Douglas, P. H. (1966; 1928): 'Smith's Theory of Value and Distribution,' in J. M. Clark and others, *Adam Smith, 1776-1926*, Chicago: University of Chicago Press, 1928; reprint ed., New York: Augustus M. Kelly.
- Dumont, L. (1977): *From Mandeville to Marx*, Chicago and London: University of Chicago Press.
- Hobbes (1980; 1651): *Leviathan*, (ed.) C. B. Macpherson, Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books. 水田 洋訳『リヴァイアサン』(全4冊), 岩波文庫, 1954-85年。
- Hueckel, G. (1998): 'Smith's Uniform "Toil and Trouble": A Vain Subtlety?' *Journal of the History of Economic Thought*, 20(2), pp. 215-33.
- (2000a): 'On the "Insurmountable Difficulties, Obscurity, and Embarrassment" of Smith's Fifth Chapter,' *History of Political Economy*, 32(2), pp. 317-45.
- (2000b): 'The Labor "Embodied" in Smith's Labor-Commanded Measure: A "Rationally Reconstructed" Legend,' *Journal of the History of Economic Thought*, 22(4), pp. 461-85.
- Hume, D. (1964; 1882; 1752): *David Hume, The Philosophical Works*, 4 vols., (eds.) T. H. Green and T. H. Grose, Darmstadt, Germany: Scientia Verlag Aalen, vol. 3. 田中秀夫訳『ヒューム 政治論集』, 京都大学出版会, 2010年。
- Khalil, E. L. (1991): 'Adam Smith's Concept of Labor-Commanded: A Study in Misinterpretation,' *New York Economic Review*, 21(2), pp. 34-49.
- Liebknecht (1902): *Zur Geschichte der Werttheorie in*

- England, Jena: Gustav Fischer. 八木澤善次訳『英国価値学説史』, 弘文堂書房, 1926年。
- Malthus, T. R. (1820): *Principles of Political Economy, considered with a View to Their Practical Application*, London: John Murray. 小林時三郎訳『マルサス 経済学原理』(上・下), 岩波文庫, 1952年。
- (1974; 1836): *Principles of Political Economy, considered with a View to Their Practical Application*, 2nd ed., London: William Pickering, 1836; reprint ed., Clifton: Augustus M. Kelley.
- Marx, K. (1974; 1867): *Das Kapital: Kritik der politischen Ökonomie*, Bd. 1 (hrsg.) Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin: Dietz Verlag. 大内兵衛・細川嘉六監訳『資本論』, 第1巻(全5分冊), 大月書店, 1968年。
- (1965-68): *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Bd. 26.1-26.3, (hrsg.) Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin: Dietz Verlag [Karl Marx, *Theorien über den Mehrwert (Vierter Band des „Kapitals“)*, 3 Teilen]. 大内兵衛・細川嘉六監訳『マルクス=エンゲルス全集』, 第26巻(全3分冊), 大月書店, 1969-70年 [『剰余価値学説史(『資本論』第4巻)』(全3分冊)]。
- Meek, R. L. (1973; 1956): *Studies in the Labour Theory of Value*, 2nd ed. London: Lawrence & Wishart. 水田 洋・宮本義男訳『労働価値論史研究』, 日本評論新社, 1957年 [初版の邦訳]。
- Mill, J. S. (1926; 1848): *Principles of Political Economy, with Some of Their Applications to Social Philosophy*, new impression, (ed.) W. J. Ashley, London: Longmans, Green & Co. 末永茂喜訳『経済学原理』(全5冊), 岩波文庫, 1959-63年。
- Nakagawa, E. (中川栄治) (2021a): 'Adam Smith's Causal Explanations of the Variations in the Value of Commodities in the Progress of Improvement: Rent Theory and Value Analysis (1)', *HUE Journal of Economics and Business* (『広島経済大学経済研究論集』), 43(3), pp. 5-24.
- (2021b): 'Some Implications of Adam Smith's Causal Explanations of the Variations in the Value of Commodities: Rent Theory and Value Analysis (2)', *HUE Journal of Economics and Business* (『広島経済大学経済研究論集』), 44(1), pp. 1-16.
- O'Donnell, R. (1990): *Adam Smith's Theory of Value and Distribution: A Reappraisal*, Basingstoke and London: Macmillan.
- Ricardo, D. (1951; 1817): *The Works and Correspondence of David Ricardo*, (ed.) P. Sraffa, vol. 1: *On the Principles of Political Economy and Taxation*, Cambridge: Cambridge University Press. P. スラッファ編『デイヴィッド・リカード全集』I: 堀 経夫訳『経済学および課税の原理』, 雄松堂書店, 1972年。
- Robbins, L. (1958): *Robert Torrens and the Evolution of Classical Economics*, London: Macmillan; New York: St. Martin's Press.
- Roll, E. (1973; 1938): *A History of Economic Thought*, 4th ed., London: Faber & Faber. 隅谷三喜男(代表)訳『経済学説史』(上・下), 有斐閣, 1951-52年 [1945年第2版の邦訳]。
- Schumpeter, J. A. (1954): *History of Economic Analysis*, New York: Oxford University Press. 東畑精一訳『経済分析の歴史』(全7冊), 岩波書店, 1955-62年。
- Smith, A. (1976; 1759): *The Theory of Moral Sentiments*, (eds.) D. D. Raphael and A. L. Macfie, Oxford: Clarendon Press; Glasgow edition. 水田 洋訳『道徳感情論』, 筑摩書房, 1973年。
- (1976; 1776): *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, (eds.) R. H. Campbell and A. S. Skinner, Oxford: Clarendon Press; Glasgow edition. 大河内一男監訳『国富論』(全3巻), 中央公論社, 1976年。
- (1978): *Lectures on Jurisprudence*, (eds.) R. L. Meek, D. D. Raphael, and P. G. Stein, Oxford: Clarendon Press; Glasgow edition. (Report dated 1766部分——B ノート——の邦訳: 水田 洋訳『法学講義』, 岩波文庫, 2005年。)
- Sowell, T. (1974): *Classical Economics Reconsidered*, Princeton, N. J.: Princeton University Press.
- Spiegel, H. W. (1971): *The Growth of Economic Thought*, Durham, N. C.: Duke University Press.
- Wieser, F. von (1889): *Der natürliche Werth*, Wien: Alfred Hölder. 大山千代雄訳『自然価値論』, 有斐閣, 1937年。